

第3回「子母澤寛文学賞」（短編小説部門）【大賞】

「秀吉と新左衛門」

東京都 牧子 嘉丸

1

慶長三年の暮春、豊太閤秀吉は伏見城大広間の首席に座していた。

宵より始められた宴も酒礼・饗膳とすすみ、酒宴となって杯の応酬でしばしにぎやいでいたが、深更ようやく果てようとしていた。

酔いしれた話し声も次第に静まり、それまでのざわめきが潮のひくように消えると、一同の胸中には言いしれぬ不安がこみあげてきた。そして、不吉な影がすぐさま首座の上に射しはじめた。

ほんの一月前に醍醐寺で開かれた盛大な花見の宴の余韻は洛中にも城内にも残っていた。その日のために境内では庭園が設えられ、ここかしこ造築された。また、まわりの山には何百本という桜が植えられた。

そこに秀頼はもとより北の政所・淀君の正室側室をはじめ、諸大名とその家族ら千数百名が招かれ、料理に酒肴に茶事にとこれ以上ない贅を尽くした饗宴であった。

この春爛漫を謳歌した一日もやがて寂しく暮れようとしていたときであった。昔から律儀者と秀吉から可愛がられ、きょうも唯一人大名で陪席を許された

加賀大納言前田利家が感に堪えぬようにしみじみと秀吉に語りかけた。

「殿下。まさに歡樂極まりて哀情多し、とはこのことでございますな」

「うむ、」秀吉は頷いた。

いささか漢籍に自信がある利家がさらに「少壮幾時ぞ」とつづけようとする

と、耳元で「殿っ」というまつの厳しく制する声が聞こえた。はっとして利家は

飲み込んだ。瞬間、思わぬ緊張が走ったが、秀吉は聞くでもなく、茫洋と暮れゆ

く春の名残を惜しんでいた。

この話はその場に居合わせた女どもの口からすぐ大名諸侯の間に広まった。

危うく太閤の機嫌を損じかねないところをまつ様の機転で救われたという噂

が流れた。これを伝え聞いた内府徳川家康はふんと鼻先を鳴らした。「利家のさ

かしらめ。槍でも振り回しておればよいものを。何の、あの猿めに唐の古詩など

わかるものか」

漢の武帝が開いた壮大至極の宴に比べればこんな花見はおよそ比ではなか

ったであろう。が、「少壮幾時ぞ、老いをいかんせん」と死の影に心安んずるこ

とない王座の怯えに唐本朝のちがいはなかった。

今宵の宴はその醍醐寺での花見の慰勞であった。警護や接待、また案内などに

まわった諸侯の労をねぎらったのである。しかし、もはや心はここになかった。

つぎの天下人は駿河大納言から内大臣までに登り詰めた徳川様。この隠忍

自重居士は表に恭順をよそおいながら、虎視眈々と秀吉の寿命が尽きるのをいまかいまかと狙っている。

そのことを誰よりも秀吉は知っていた。いくら誓書を書かせ、血判を押させ、泣いて秀頼のことを頼んでも、この男が約束を守るとは思えぬのだ。かつての自分が信長の死後、三歳の孫三法師をたてて織田家から実権を奪い盗ったように。果たしてその時、秀頼は一大名としてでも生かしておいてくれようか。

そんな猜疑と苦悶をはらすための日夜の宴であった。去年の秋、ちよつとした風労がもとでにわかには体の力がぬけた。頭はさすがに衰えぬが、秀吉を驚かせたのはあの絶倫なる己が精力が消えたことだった。それはいぼり（小便）をまき散らすだけで、時にはしとねを濡らしてしまう有様だった。

「殿。今宵はここらで」近侍が恐る恐る言上した。秀吉ははつとして夢から覚めたように、白々した一座を見まわした。早く退出したい思いをこらえかねている様子であった。

「うむ」とうなづいてから、急に気づいたようにいった。

「して、ちかごろ新左の姿が見えぬが、まだ煩ろうておるのか」

「はあ」と面を伏せた。

こんな時に、あれがおれば軽妙洒脱な軽口で座をにぎやかし、笑いのさざなみをおこしたであろうのに、と秀吉は思い、またその名を聞いて皆の者もすぐそ

う思った。

曾呂利新左衛門。秀吉のお伽衆としてその名を知らぬ者はおらぬが、しばらく微恙にことよせて出仕を見あわせていた。

「それにしても、ちと長うはないか」

「はあ、それが」

「わるいか」「はあ」と面を深く伏せた。

秀吉はそうかと気の毒そうな顔をしてみせたが、瞬時にやりとしたのを面をあげた近侍は見逃さなかつた。

「今宵はこれまでじゃ」

秀吉は小姓に抱えられて、寢殿に向かいながら、近いうちにあの新左めを見舞うてやろうと思いついた。

2

新左衛門は伏見の屋敷で床に伏せていた。うつらうつらとまどろみ、まどろんでは薄目をあけて障子をしばらく眺め、また目をとじて眠った。

去年の秋深い夜であった。厠に出ようと障子を開けたとき、ひゅつと一刷毛の風が首筋に吹きこんだ。思わず大きなくさめをしたとたん、粟粒が背中にかじりついた。戻って書見をつづけようとしたが、悪寒が止まずそのまま数日寝込んでしまった。

そのころから何やら急に浮き世が煩わしくなり、むなしい気分おそに襲われだして、何をするのも億劫おつくうになった。ちようどかぜを引いたのを幸いと、病と称して出仕おこたを怠っていた。

以来、胸中に何やら得体えたいの知れぬ一点の黒い影が染みついた。それが日増しに大きくなり、とぐるをまくようにして胸の片隅かたすみに居ついた。

泉州せんしゅうさかい堺じんえもんに杉本甚右衛門という鞘師さやしがいた。どんな刀でも甚右衛門が作った鞘にはそろりとおさまるので、そろりの鞘師としてその腕前は世間に知られた。

古来こらい堺は刃物、鍛冶かじが有名で、多くの刀鍛冶が住んで、武器づくりが盛んだった。

天正十三年てんしょうのことである。羽柴秀吉はしばが四国の豪族長曾我部氏ちようそがべを討つために、阿波あわ、讃岐さぬき、伊予いよの三方から八万の大軍を送り込んだ。秀吉自身しんせいも親征こころを呼号して、堺まで出向たいじんき滞陣した。

当初は秀吉らいせんの来泉で町はにぎわったが、所詮しよせん商人と武人は水と油。やれ屋敷を貸せか、蔵を開けよと、迷惑めいわくせんばん千万ながい。長居する客ほど商人から嫌がられる者はいない。

そんなとき、白木の板に黒々と墨書ぼくしよされた立て札が立った。

太閤しこくが 四石の米を 買ひかねて

きょうも五斗ごどかひ あすも五斗かひ

いっこうに四国に渡海とかいせぬ秀吉をからかった狂歌きやうかだった。

堺の町奉行は探索して、甚右衛門を捕らえた。というより、他に累が及ばぬようにと自ら名のり出たのである。さつそく秀吉の前に差し出された。

「その方、四石の米を買いかねたなどと、わしを愚弄したのはなぜじゃ」

「愚弄などと滅相もない。五斗買いには及びませぬ。はよう四国をお買いあげなされという町民どもの願いを詠んだだけでございます」

秀吉の欲している意中を見事に言い当てた。秀吉はこの頓才と心憎い追従に感心して、助命し家来に加えた。そのとき、生まれ変わったしるしに、姓名の儀を革めたいと申し出て許された。これが豊太閤第一のお伽衆曾呂利新左衛門誕生の由来である。

が、みな後に自身が言い広めたことである。鞘師で刀がそろりと収まらぬ鞘をつくる者など聞いたこともない。立て札に狂歌を書いたのも後知恵で考えたつくりごとである。

滞陣中のさる武將に鞘づくりを仰せつかったときに、御代のかわりに何とかお伽衆の端くれにでもと頼んだのである。その武將はあまりに見事な鞘に感じ入り、伽衆のひとりに熱心に口入れしてくれた。

まさにその口八丁手八丁で新左衛門はめきめき頭角をあらわし、秀吉の氣にいられた。見え透いた追従や世辞に飽き飽きしているのを新左衛門はすぐ見抜いた。いっけん突拍子もないことを言っつて、秀吉を驚かせたり、怒らせたりしな

がら、最後は巧みに落ちをつけるのだった。そして、いまや天下無双といわれるほどの頓知頓才の伽衆であった。

顔が猿に似ているのを始終気にしている秀吉に「猿のほうが殿下に似ておるのでございます」とご機嫌を伺ったことや、御前で屁を放ってあやうく手打ちにされかけたとき、

世の中よ 屁こそなけれど 思ひ入る

山の奥にも 尻ぞ鳴くなる

と狂歌で返した、というたぐいでそのつど殿を喜ばせもしたが、もう思い出したくもなかった。

こんなこともあった。伏見城落成の間近の頃である。祝賀の宴もいよいよという矢先に、大門に落首があった。

「おごれる者はひさしからず、むかし清盛いま太閤。我が世誰ぞ常ならむ」と能筆で大書してあった。聞いて秀吉は激怒した。さつそくひつ捕らえて打ち首にせよと嚴命が下された。大工や職人・工人らを詮索して、あやしき浮浪人の人足らを二三名捕らえて責めてみたが、白状しなかった。しかし、秀吉はかまわぬから見せしめに、首をはねよと聞かない。「いましばらくの詮議を」と申し立てて、捕り手預かり方のある奉行がそつと新左衛門に知恵を借りに来た。

かつて仕置きのもとに、番人や責め手、指図した奉行所の役人どもが頓死し

たり狂死きやうじしたり、またその一族に凶事きやうじや変事へんじが相次いだという。

「それもこれも、あの罪なき者への殺生せつしょうが故ではないかと思つた次第で。以来、何やらどうも寢覚めがよい。そこで、後生ごしょうのためにも新左衛門殿になんぞよいお知恵はござらぬかと思つてな」

「なんの、造作ぞうさないことで」新左衛門はすぐに請け負うた。きつそく伺候しこうして仕置きしおきの件を持ち出すと秀吉の顔色がきつと変わった。

「しかし殿下。せつかくの落成の首途かどてにお手打ちなど禍々まがまがしいことで。中国の故事にも古木を切つてさえ城中に凶事・災厄さいやくを招いた例がございます」

「何。ならばなんとする」

「落首には落首で返報へんぱうしてやるのです」

新左衛門は持参した巻紙まきがみをするすると広げた。

「おごれる者はひさしからず、おごらぬ者もまた然りしか。世の中は常ならむこそおもしろけれ」と見事な筆さばきで大書してあつた。見て秀吉は喜んだ。おごろうが、おごるまいが所詮しよせんは常なき世の一生一代。ならば天下におごりを極め尽くしてこそ天下人じゃ。

新左衛門はきつそくふたつの落首をならべて町に掲げさせた。町人どもはその機知を喜んで囃はやした。思えば、口舌こうぜつの徒としていささか人助けに役立ったのはあのときぐらいのことであろうか。新左衛門は寂しく笑つてまた目をつぶった。

新左衛門はまどろみながら、おのれの来し方行く末に思いをはせた。が、もう自分に行く末はない。あるのは来し方ばかりである。

あるとき、秀吉から出自を聞かれて応えたことがある。

「わたくしめは刀鍛冶の家に生まれましてな。親父殿はこのわたしをそれは熱心に仕込んでくれました。が、どうもあのぎらりとした刃のひかりが気味悪うてしかたなくなりました。あれで人の首を切ったり、心の臓を突いたりするのかと思うただけでもぞつといたします」

「うむ。わしも人斬りは嫌いじゃ」と秀吉は応じた。「それでそちは鞘師になつたのじゃな」

「御意」新左衛門は答えた。

「しかし、殿」新左衛門はここが聞かせどころと声に力をこめた。

「どんな真剣も折紙がつかねば、何の価値もありませぬぞ。剣と鞘とこの折紙がついてこそ、まぎれもない天下の名刀、名宝。堺ではこれがうるさく吟味されるのでございます」

「して、その折紙とは」秀吉は扇をぱちりとならすと、身を乗りだした。

「刀の銘柄の証立てでございます。何尺、何寸の寸法で、いつどこで誰が打ったかを記した折紙がなければ、二束三文の値打ちもございません。それこそ、

宝の持ち腐れ」

「三成を呼べ」といきなり秀吉は叫んだ。参上した石田治部少輔三成にむかつて、こう言い放った。「よいか、これからは折紙のつかぬ刀は真贋定かならぬというふれを出せ。新左、そちは堺へ行って目利きを呼べ。それから折紙の元締めには本阿弥を命ぜよ」

一振り、数百両という名刀・宝剣は諸大名家にいくらでもある。まして、武士の命と心得る武将どもにとって、どれほど高値もつけても文句は出まい。その一二割を折紙の料としただけでも、莫大な実入りである。秀吉はすぐさま算盤を弾いた。

新左衛門の目論見は当たった。秀吉は武辺話や戯れ言だけで、高い扶持を払って伽衆を召すような男ではない。かならず相応の実利・実益の見返りを求めているのである。

秀吉が新左衛門を重宝がるのは、その抜群の商才と全国に放つてある乱波・素っ波などの及びもつかぬ諜報を得てくることであつた。秀吉はこれという有力大名に新左衛門を差し向けた。

ときにはどこそこの御大名の妻女・息女のそれはお美しいことと言上して、秀吉の好色をそることも忘れなかつた。

秀吉が諸大名のなかで一番腹の底が知りたい男は誰よりも徳川家康であつた。

あんな吝嗇りんしやくでは家来も心底からは臣従しんじゆうしまいと噂し、諸侯は軽んじていた。が、秀吉と新左衛門は信じなかった。

「徳川殿、どうじゃ、この新左衛門を一度夜伽よとぎに遣つかわしましょうかな」と宴の席で言うと、家康はたいそう喜んだ。伺候してご機嫌を伺うと、家康はどんな話にも興味を示し、また、頓知とんち噺ばなしや笑話たいこばらに太鼓腹たいこばらをかかえてころころと笑いもした。好奇心旺盛おうせいで、まことに屈託くつたくのない人物に映った。

そこで「ここだけの話しでござりますが」と内密ないみつめかして家康に誘いをかける。「殿下の刀狩りは有名でござりますが、もうひとつの狩りもお好きでしてな」

「ほう、それはなんじゃ」

「はあ。女房狩りでございまして。御家来衆は皆次ぎは自分の妻女が狙われるのではと、いくさ以上に戦々兢兢せんせんきようきよう々々としておる有様で」

「ははは。それはそれはお盛んなことで、うらやましいかぎりじゃ」とすきを見せない。

「徳川様は、三河代々の名家・名門の出でござりますゆえ、殿は一目も二目も置いて常々御尊崇ごそんすうされております」とくすぐってみせると、

「なんの、なんの。豊臣家こそ元は清和源氏のお血筋ちすじとのこと。くらべて徳川など足下あしもとにも及ばぬ三河の田舎侍いなかざむらいじゃ」と乗ってこない。秀吉は先祖を源氏などと僭称せんしょうしているが、その実下賤げせんな百姓の出であることをよく知っているので

ある。

「して、どうじゃった」秀吉は待ちかねたように参上した新左衛門に尋ねた。

「いやはや、それがなんとも腹の読めぬ御仁で」とめずらしく歎いた。

「うむ。そうか。尻尾を出さぬか」

「はあ。古狸ふるだぬきにしては」

ふたりは声をあげて笑った。しかし、それはいずれ自分たちを脅かすであろう得体の知れぬものへの空笑いにすぎなかった。

秀吉はますます家康への警戒を深めた。

来し方の追憶ついでにふけりながら、それはいつもあるひとの面影おもかげに行き着くのであった。新左衛門はそのひとをしみじみと懐かしんだ。

4

新左衛門は生前せいぜん一度だけ、大広間の饗宴の末席につらなってそのひとを見たことがあった。居並ぶ諸大名に伍ごして、黒づくめの衣を着た大柄の茶頭さじょうが殿下のお側に仕えていた。そこには何やらあたりを払う威風いふうがあつて、諸侯をも圧するような落ち着きぶりであった。

あれがうわさに聞く大宗匠利休だいそうしやう せんのそうえき千宗易殿であつたか。感嘆かんだんを禁じ得ぬ思いで、何度か遠目とおめで見やるうちに、ふと目があつた。

そのとき、利休は殿下の耳元に何かをささやきかけた。すると、ふたりは自分

を見て笑ったように見えた。

瞬間、新左衛門は目の前が青黒くなって、頭がくらくらとした。人を笑わせても、おのれが笑われることは許せぬ。新左衛門は瞋恚で目がくらみそうになった。

「何をこの、茶坊主め」新左衛門は齒ぎしりするように心のなかで呻いた。人前でこれほどの恥をかかせられたことはない。怒りと悔しさで、その後のことは何も覚えていなかった。

宴が終わり、殿下は皆が平伏するなかを近習とともに退出した。その後を大名がつづき、やがて利休もゆっくりと立ち上がった。偉丈夫であった。

怒りに震えながらも面を伏せて、利休の過ぎるのを待っていると、ふと新左衛門の前で足をとめたのである。そして、さも懐かしげにこう語りかけてきた。

「新左衛門殿も、堺の出じゃそうななあ」

「はっ」

「儂ももとは堺の魚問屋のせがれじゃ。どうぞよしなにのう」

新左衛門はとっさに平伏するとしばらく面があげられなかった。瞬間、体じゅうが熱くなった。殿下へのささやきは新左衛門に同郷の誼を感じてくれたからであろう。そのありがたさとうれしさがこみあげてきた。

しかし、このときほどおのれの卑しき恥ずかしきを思い知ったことはない。

かつて伽衆として殿下の側にいて、いま利休がしたように耳元に何事かをさ

さやいたことがある。すると、そのときまたまた陪席していた大名から翌日山やまのような貢ぎ物が届けられた。不思議に思った新左衛門は、伺候の場で同じ事を繰り返してみると、また翌日届けられるのであった。これに味をしめた新左衛門は富裕ふゆうな大名を狙って、じつと見つめてからそつときさやくのであった。

新左衛門の蔵はたちまち米俵でいっぱいになった。中には菓子箱こばんに小判しのを忍ばせるものであった。太閤殿下に何やら陰口かげぐちが吹きこまれたのではないかと怖れてのことである。

新左衛門はこれを殿下の耳にの臭においを嗅かぐと称して、面白くてやめられなかった。

「新左め、わしの耳を嗅いで蔵をたてよるは」と秀吉は笑った。

自分がやってきたことはいったい何であったか。ただ舌先三寸で権勢には限りなく媚こびへつらい、下の者どもは侮あなどり見下してきたに過ぎない。

それにくらべて今は亡き利休居士のなんとこころいう心映えであったろうか。天下人太閤殿下にお仕えする身でありながら、心は闊達自由かっただう。阿諛あゆも追従もなく、殿下のお心にまっすぐに向き合ったのだ。

しかし、それが怒りにふれて、死たまを賜うことになろうとは。御賢弟大納言秀長ごけんてい ひでながさまさえ生きておられたら、あのようなことには。関白秀次様へのむごい仕打ちもまた。

新左衛門のなかに秀吉に対する暗い疑念がこみ上げてくる。天空海闊、
天衣無縫で屈託のない人物として、盛んに持ち上げられてきたが、果たしてそう
か。その裏面は抜け目ない野心家として、いつも強欲と劣情、妬心と驕慢がな
い交ぜになってどす黒く渦を巻いていた。

それを明るく陽気に振る舞う関白を演じ、作り話を流しては親しみのある豊
太閤と庶民をたぶらかしてきたのだ。そして、それを一役どころか、二役も三役
も買って出たのがほかならぬこの自分である。

結局はその秀吉に終生追従して、栄耀に餅の皮をむくような暮らしをしてき
たおのれの生涯も忌まわしいものであった。何の、このわしが果報者であつたら
うか。

新左衛門はまた目をつむった。

5

深い眠りからようやく目が覚めようとしている。なんでも暗い井戸の底で、た
ゆとうているような心持ちであった。細目に何かがちらちらと見える。得体の知
れぬ者が上からじっと見下ろしている。よく見ると木の上にいる年老いた猿だ
った。胸を詰まらせるような厭な面貌であった。

といきなり、その皺まみれの醜悪な顔が、真上からのぞき込んだ。

新左衛門はあつと叫んで目が覚めた。しばらく目を宙に浮かばせていたが、や

がて視線が相手に定まったとき、「これは」と言っておわてて起きあがろうとした。

あろうことか、いつのまにか豊太閤秀吉が枕元にいたのだ。

「苦しくない、そのまま、そのまま」

秀吉は鷹揚に構えていた。

「ちと長患いじゃで、見舞うたのじゃ」

「殿下、忝ない。それがしの見舞いなど誠に恐れ多いことで」

「いや、いや。してどうじゃ、具合は」

「今度ばかりは、もう助からぬようで、医者も匙を投げておりまする」

「ふーん。それは気の毒なことよなあ」

「殿下、長い間、ご恩顧を賜りましてありがとうございます。今生の暇乞いに御礼申し上げますことができましたが、せめても慰めでございます」

「そうか、いよいよか」

秀吉は嘆息してみせたが、「して、新左」といきなり身を乗りだした。

「死ぬるときの心持ちとはどんなものじゃ」

新左衛門は目をつぶった。

「どうじゃ、新左。古今無双の頓知の名人と言われたそちじゃ。死に臨んでありきたりな辞世の句など詠んでもつまらんど。なんぞ気の利いた文句のひとつ

も出ぬものか」

この男は見舞いにきたのではない。わしの死をひやかしにきたのだ。新左衛門はかつと目を開いた。

「殿、人は、」

「さて、人は」

「人は死にとうはございませぬな」

「なんじゃ、それだけか」

「殿もまた、死にとうはございますまい」

「うむ。わしも死にとうはない。たしかに死にとうはないな」

秀吉は死が自分でないことにこみあげるような喜びを感じた。

その心底を見極めた新左衛門はここを一期と覚悟を決めた。

「それにしても、殿のいくさ上手は天下一でござりましたな」

秀吉はおのがいくさの功名だけは何万言の褒め言葉が費やされても聞き飽き

るということはなかった。せめてこやつまつじの末期の世辞でも聞いてやろうと

思った。

「殿は兵糧攻めが得意でございましたな」

「そうじゃ、わしは人をやたらと斬ったり突いたりする血生臭い合戦が嫌いで

のう」

「なんの、なんの。あれはあれでむごいいくさではござりませぬでしたか。三木の干殺し、鳥取の飢え殺しと世間で言われておる兵糧攻め。わずかな食糧を親胞で血眼で奪い合い、聞くも恐ろしき餓鬼地獄の噂に震え上がったことでございます」

「それは三木の領主がはよう降伏せなんだからじゃ。おのれの意地やら面子やらで、家来ばかりでなく領民まで犠牲にしおったわ。が、鳥取城主吉川経家はおのれの切腹と引き替えに郎党士卒の助命を申し出たので、聞き入れてやったのじゃ」

「いや、いや。兵糧攻めで降伏した兵士にはうす粥を食わせるのが常でありますのに、生煮えの強飯を与えたとか。あまりの空腹にまかせてその飯を喰らった兵どもはたちまち腹を抱えて悶絶し、せつかく生き残った兵の半分ちかくが死んだとのこと。後にある武将があれば殿の御指図であったと申されておりましてよ」

「知らぬ」

秀吉はだんだんと不快が募ってくるのを、末期の戯言と我慢した。

「殿。殿は死にとうない、死にとうないとおっしゃるが、同じく死にとうない人をぎょうさんに殺めましたな」

「それもこれも、天下取りのいくさのためじゃったのじゃ」

「そうばかりではありません。あの本能寺の凶変を伝えるために足輕の飛脚が陣中に参ったことがござりましたな。菅笠の緒に隠した密書を読むと、殿はその飛脚を厠に連れこんで物も言わずに刺し殺されました。雨にうたれ土にまみれながら、日に夜を継いで走り通したこの飛脚に一杯の白湯さえ与えず、いきなり刺し殺して、しかも厠に投げ込んだ。糞尿にまみれた遺骸を始末した御家来衆は何の事情か知らぬが、あまりにむごい殺され方に哀れを感じぬ者はいなかったといまも語り草になっておりますぞ」

秀吉はとうの昔に忘れ去った記憶が瞬間に蘇った。それは毛利攻めするとき、備中高松で城主清水宗治と媾和談判している最中のことであつた。密書を読んだ瞬間、小柄に手をかけたが、それをぐっと抑えて、厠に連れて行つたのだ。

「新左、お前などには武将の心得などわかるうはずもない」

「そうでございましょうか」

「あまりに無慈悲と言いたいのじゃろうが、そやつ之死で媾和もでき、城主宗治の切腹だけで済んだのじゃ。小の虫を殺して、大の虫を生かす。いくさの世じゃ、仕方あるまいて。なにより天下太平のためじゃ」

「では、新左。今際の際に臨んで申し上げるが」

新左衛門はふとんを飛ばして跳ね起きた。

「あの利休居士の賜死や関白秀次様の御切腹も天下太平のためと仰せでしょ

うか。四条河原しじょうがわらでのあの御妻妾ごさいしやうや幼君むぎみたちの無惨むざんな最期さいごもまた」

「黙れ、下郎げろう。この死ぞこに損そこないめ！」

秀吉は真まっ青きおになって、思わず腰こしに手をかけたが、無刀むとうであった。

「いえ、黙もりませぬ。何なにの罪つみとがもない朝鮮国たみくさの民草たみくさは耳みみや鼻はなを削そがれて、」

「えーい。黙だまらぬか」

秀吉はいきなり新左衛門しんざゑもんの胸むねぐらをつかむと、喉元のどもとをしめあげた。新左衛門も

秀吉にしがみついた。ふたりの顔かほが触ふれあわんばかりになったとき、苦悶くもんの表情へいしやうを浮かべている新左衛門しんざゑもんの口くちからふっーと太ふとい息いきが漏もれ出でた。

「うつ」とまともにその息いきを浴あびた秀吉しうきちは思おもわず手てを離はなして、鼻はなをおおった。

その何なにという生臭なまぐささ。まさまさに死臭ししゆうであつた。

「誰たれか」秀吉しうきちはふらふらと立たち上あがった。

次つぎぎの間まで控ひかえる近侍きんせが駆かけ寄より、両脇りやうわきを抱かかえられて廊下ろうかに出でた。

新左衛門しんざゑもんは死しんだようにそのまま倒たおれ伏ふしていた。

その日ひから昏々こんこんと新左衛門しんざゑもんは眠あった。もはやこのまま助すけからぬであろうと皆みなが覚悟かくごしたとき、果はたして新左衛門しんざゑもんは朝あのままぶしい光ひかりのなかでそそと目めを開あけた。息いきをふきかえたのである。

それから不思議ふしぎなことが起おこつた。一日いちにち一日いちにち、薄皮うすかわをむくように病やまが怠あつてい

った。「あのとき、わしの体に長年おろ澱のように溜たまっておった毒気がぬけたのじや。あまりに臭い耳を嗅かぎすぎたからのう」

不思議は伏見城内でも起こった。あの日をさかいに太閤秀吉は一気に病やみついた。「御咳痰せきたんやまず」と記録にある。

伝え聞いた家康は小躍りこおどした。急いで病床に参じた家康は、面に悲痛ひつうの色を浮かべながら、そのあまりの衰弱すいじやくぶりをこの目で確かめてこれはいよいよと腹のなかで笑いかみ殺した。

「猿め。あの息の臭いが消えぬのじや、あやつの口から吐き出た死神しにがみの息がわしの身に入ったのじや、と訳のわからぬうわごとを言っておったわ」と側近にうれしげに語った。

寝ついた秀吉は夜を嫌った。少し眠るとすぐ咳せき込んで目が覚めた。このことを何より怖れた。うつろな目を開けて天井てんじょうをながめて過ごした。

ふと枕元で茶を点たてている黒い茶頭の影が見える。大きな手がぬっと出て、あの不吉な黒茶椀くろぢゃわんが差し出される。口を近づけ飲もうとすると、あの臭いが鼻を打った。はっとして影に目をやると、死んだ利休がじっとこちらを見つめている。

あつと言つて茶椀を落とすと、真っ赤な血が一面に流れ出した。

流れ出た血の先に、脇差わきざしを胸に刺されたあの飛脚が血まみれでうずくまっている。

天下人豊太閣豊臣秀吉はこうして毎夜悪夢に襲われつづけて、狂い死にした。

秀吉の死後、新左衛門は泉州堺に帰った。もう武将や大名に抱えられる伽衆はやめにして、同じ口舌でも町人衆やお百姓を喜ばせる一口噺ひとくちばなしや頓知遊びを披露して余生よせいを過すごした。

このとき、平林平太夫へいだゆうという者が新左衛門の弟子となって師に劣らぬ才気かんぱつの活芸を磨いたという。上方かみがたにおける噺家の鼻祖びそといわれた安楽庵策伝あんらくあんさくでんの

俗名そうかんと巷間こうかん伝えられている。